

アート思考入門 (8)

アーティストの発想がどのように社会的な課題を解決したか。今回は日本の地方の例を紹介する。

瀬戸内海に犬島(岡山市)という島がある。明治時代、この島に銅の精錬所が建設され、最盛期には2000人を超える労働者が働いた。その後、大正時代に操業停止となり、廃墟となっていた。アーティストの柳幸典氏がこの廃墟を13年の歳月をかけて自然エネルギーとアートで再生、2008年に犬島精錬所美術館として完成させ、国内外から高い評価を受けている。

このプロジェクトでは、斬新なコンセプトを構築するには、自分の立ち位置が重要であることを示している。

柳氏は長い間、米ニューヨークで活動していた。1992年、瀬戸内海の直島(香川県直島町)の美術館「ベネッセハウス」で個展を開いたのをきっかけに、瀬戸内海の魅力にとりつかれ、帰国のたびに訪れていた。95年、犬島を訪れ、精錬所の廃墟を見て、自分が求めていたものと直感したという。

当時、ニューヨークを中心にアート作品が世界的に高騰し始めていた。一方、犬島に行くと日本の近代化を支えた工場がすっかり忘れ去られ廃墟になり、産業廃棄物を投棄する計画さえあった。

柳氏は精錬所を最初に見た時、イカロスの神話を思い出したという。幽閉されたイカロスと父のダイダロスが、ロウで固めた翼を作り脱出する。しかし、イカロスは太陽に近づきすぎ、ロウが溶けて

立ち位置をずらし、新たな視点

落下してしまう話。人間の傲慢さやテクノロジーへの過信が、精錬所と重なって見えた。

都市部にいると瀬戸内海の美しい姿ばかり目にするが、地方に身を置き、位置をずらすことで違う現実が見えてくる。都会の豊かさから出てくる廃棄物に埋もれつつある近代産業の廃墟。犬島が置かれた状況に強いメッセージ性を感じた。そこで打ち立てたのが、このプロジェクトである。資金を出してくれるスポンサーを探し出し、地元の協力を仰いで犬島精錬所美術館はできあがった。

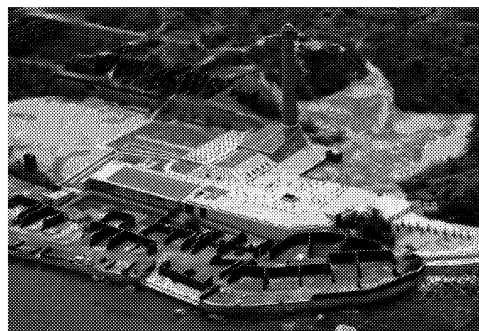
産業遺構を使った美術館の中には、日本の近代化に警鐘をならした三島由紀夫をモチーフにした作品やイカロスから発想した作品を展示した。

循環型社会も意識しており、太陽や地熱などの自然エネルギーを活用し、植物の力を利用した水質浄化システムを導入した。温まった空気が煙突を通過して外に出て行き、外気が館内に取り込まれる仕組みも、空に向かって飛び落下してしまうイカロスを思わせる。

美術館の建設にあたっては「東京にないものを創る」ことを目指し、瀬戸内を拠点とする建築家・三分一博志氏と協業した。

柳氏は犬島の他にも瀬戸内海で次々とプロジェクトを立ち上げ、船舶免許をとり船で行き来することで、海から日本を見ている。各地で開催する展覧会のタイトルに「Wandering Position (位置をずらす)」と付けることが多い。自らの立ち位置を常にずらすことで、固定概念にとらわれない新たなコンセプトを創り続けることができるという意味を込めている。

これはアーティストの話にとどまらない。米国や中国の企業に活気がある理由の一つに、大手企業が地方に分散していることがある。日本もテレワークで地方に拠点を移して働く人が出てきたが、まだ少数だ。新たな問題意識を養い、斬新なコンセプトを創出するためにも立ち位置を地方に一度ずらしてみることも重要だ。



犬島精錬所美術館